

三歳児のいろいろな活動



関 治 子

実際に経験した三歳児について、どんな活動があったか、おもい起こしてみたいと思う。その中から、のぞましいものを想像し、のぞましい活動のあり方をつくり上げていただけたらと考えている。

三歳児を受け持つに当たって、第一に家庭からはじめて社会に出る幼児を、家庭の延長のような気持ちで毎日過ごせるようにしたいと思った。また、発達段階からいっても、自己中心的な個々の生活から周囲を意識していく大切な時期でもあるので、幼稚園という場において、こういう発達のな推移を、教師としては何とかこわさずに、幼児を十分、活動させて成長させたいと思った。

幼児から出てくる活動と、教師がこうあってほしいと思う活動をかみ合わせて、よりよい幼児の成長をねがうわけであるが、何としても、教師の占める位置はむずかしい。

特に三歳児の場合は、教師の姿が、幼稚園における母親や身内の人立場になることが必要だと思う。そういう人間関係ができていけば、当然身につけるべき習慣などはきちんとなつけられ、のびのびと活動する場面は、十分に自分を発揮することもでき易いと思う。

一年間を通して、いろいろな活動のあらわれた基である友だち関係をみると、発達段階をおっているとはいえ、一年間の成長は、大きなものがあると痛感させられた。

一学期の間に、個個のあそびから、友だち関係に目ざめてきた。そのあらわれとして、仲よくもなるが、けんかがあらわれたり、友だちと一しよに、ただただ遊具を移動してあそぶことだけを楽しんでいたりした。概して、あそびは長つづきしない。

二学期には、だんだんに、協力することを知って、グループができてくる。二人位ずつのあそびが、適当に合流する。いろいろな遊具を、目的をもって使うようになってくる。

三学期には、かなりグループ意識が出てきて、役割をもったごっこあそびがみられ、かなり大勢の人数であそぶことも、できるようになってきた。一方、なかなか友だちになじめない幼児も、友だちができてくる。

次に、具体的な活動をいくつか、かいてみたい。これは、自由あそびの場において、あるいは、製作活動の場において、あるいは、その他のいろいろな場において出てきたものである。しかも、一つ

の系統的な○○ごっこというようなものでもない。積木あそびの中に、他のごっこあそびが合流したり、時には、教師の発案で発展したりというように、実にいろいろな要素を含んでいる。とても、分類して、整然となどかけない。幼児の生活というものが、こういうもの、つまり、混然として総合的で、未分化であるというのが、特徴だと思ふのである。

○パーベキューごっこ

ままごとのグループで、一人の男児が、「パーベキューをしましよーう」といい出したのがきっかけで、ままごとのグループと積木やレールあそびのグループが合流してあそんだことがある。積木や、組木、ヘアブロックを組み合わせて、それらしい材料をつくっては、運んでくる。ままごとグループはお皿を運び出す。今まで、ただ遊具を移動するばかりだったあそびに、同じ遊具を移動するのにも、パーベキューの材料をつくって行くという目的が加わった。それによって、やくどころもつくらなくてはというので、積木が総動員されて、大きなコンロができた。

「まだこれは、やけていませんよ」

「そうですか。よくやけたら三本、おいしいのを下さいな」

「おおあつ。おいしいですね。お皿をおくのに、お机を並べて下さいな」

教師が中にはいってあそんで、実際を通しての会話から、あそび

のひろがりど、友だちの結びつきが出てくるような気がした。時間としては、そんなに長くはないが、このような形式が、時期をちがえると次のような形であらわれた。

○もちつき

お正月近くになると、もちつきあそびがみられた。ヘアブロックで、いろいろな形を楽しんでいた幼児が「ベッタタンコ」といいながら、きねをつくった。教師もまねをして、きねをくふうしてつくって「ベッタタンコ」と、おもちをついた。

もちつき 大きな臼にたくさんおもちがつけた



「じょうずにつけますね。たくさんつけましたか」

「待って下さい、今できますから」

といいながら、周囲をぐるりとベアブロックでつないで、白をつくり、中にばらばらにしたベアブロックをたくさん入れた。

「つきたてのおもちをいただきますよ」

「やわらかいですね」「ああおいしい」

こんな刺激のことばで、三々五々集まってきた。もちつきを實際知らない幼児でも、簡単に参加して、雰囲気の中にはいりこんでしまった。はいつてこない幼児も、自分のあそびをつづけながら、こちらをときどき眺めている。

こういうあそびの時、教師の発案が、刺激となってよりよく発展していくこともあるがともすると、余り結果だけを考えて、教師の自己満足で、ひっぱってってしまうことも恐ろしい。かといって、放任してしまうことも恐ろしい。教師が、型を示さずに、幼児の考えを通して、幼児が活動していくように、それを育てるのが、よい教師なのだろうと思いをはせる。

○電車ごっこ

輪が、一台の車となつてあそんだり、室内の一隅で椅子を並べて電車にしてあそぶことがあつた。こんな時、まだ個々のあそびの方が多い時期でもあつたので、教師が「のせて下さい」と話しかけて、教師や友だちの結びつきを計つたことだつた。タクシーのつも

国際救助隊 サンダーバード2号ができ上がった



りの幼児は「百円です」教師は、あわてて「ハイ、これでいいですか」ときれいな小石や葉を拾つて、急場のお金にする。

幼児は、この小石一つ、葉一枚でも嬉しくて、顔をほころばせる。こんな所から、切符

や、かばんをつくり、電車ごっこをするようになる。というより、切符きりごっこといった方が、似つかわしい。切符きりの缺は、五つ位用意したものを交代に使つた。この交代に使うことが、三歳児にとっては、非常にむずかしいことだつた。適当な時間だけ自分の所有になることが、この年齢の幼児には、理解はできても、実行で



きない。ブランコの順番を待つことができても、所有欲はまたちがうらしい。思いがけない幼児が、いつまでも自分の引き出しにしまい込んでしまったりした。発達のみにみて、まだ早かったのかも知れないが、約束をして交代に使うこと、これも教師の命令として受け入れるのでなく、自分からやれるようになっていった。

三歳児の電車ごっこの場合、制約を多くしてしまって、あそびを複雑にむずかしくしてしまうより、補助材料などを教師がくふうしてやって、いつでも自分であそびたい時に、そのものになりきって楽しんであそべる方がよいのであろう。部屋の中に二か所ほど、バスにあるような切符入れの箱をつるしておいた。

「どちらまでいらっしやいますか」

ちょっと並んで何人が腰かけると、カバンと切符を出してきて、切符をきってくれる。その時、即座に「大塚」「池袋」などと駅名をいうとご満足。全く、はじめは友だちにとけこめなかったのに、彼女にとっては、隅っこがくしゃくしゃになっても、ピンク、黄、水色と色の紙が束ねてあるその切符が、何よりも大切で、そして安定感も優越感ももてる大切な玩具——いえ、宝物であるらしい。

○国際救助隊

テレビの影響の強い例である。それまで、ベアブロックで、ピストルをつくったり、積木で、サンダーバード二号などといいながらつくったりして、ばらばらのあそびはあったのだが、それを何人かがグループとなって、まとまった目的をもってあそぶようになったのが十二月頃のことである。そして、三学期はこれに終始したというよい位であった。

ある日、ままごとの台所の前にすわりこんでいろいろな遊具を流しに一ぱいにし、ブロックでできたマイクを口元に、一生懸命語りかけていた。その後、テレビをみた私はびっくりしてしまった。国際救助隊の連絡員として人里離れた農家の台所が、秘密の通信場所になっていて、ボタンの操作一つで、素晴らしい通信場所になるというのであった。

毎日毎日、このあそびはつづくのだが、これがだんだんに変化し



ている。幼児のことであるから、あるグループは常に、これが基になっていくが、そこから、他のあそびや他のグループに、国際救助隊という名において、合流していく。

例えば、ままごとのグループで、全員が兎になってあそんでいたことがある。その兎が一匹にげ出したので、おかあさん兎になった幼児が、方に電話をしたり、尋ねて歩いている。「国際救助隊に探してもらいましょうか」ということで、ひとしきりあそんだことがあった。それから、兎のお面をつくったが、中には、耳だけをつけたり、顔からかいたり、それぞれ考えでお面ができること、それを頭につけた幼児は、兎になり切ったつもりなのであろう、始終とびはねて歩いていた。このお面をつくらなかった幼児が、二つも三つも作った幼児にかしてもらって、にこにこしてかぶってあそぶという、うるわしいひとこまがあった。私は胸あたたまる気持ちでみていたのだが、全く製作活動のないこの幼児が「こんどつくる？」という問いに、にっこりして、大きくうなづいた。つくりなさいといわれるよりは、自分があそぶために、何かつくりたいという自発性を待つこと、あせっては、かえって逆効果になることもある。

この国際救助隊が、ある日、プールあそびをしているグループと合流した。プールあそびのグループは、大きなこいを作っていたので、部屋の大半を占めてしまった。救助隊の基地はすっかり狭くなってしまった。はじめの頃なら、お互いにゆずれなかったであろう。しかし、三学期のこと、そのプールを、利用してあそび始め、

かわるがわるとびこんだりしていた。そのうちに、私もとびこんだりしたところ、「わにがくるからあぶないですよ。今、たすけにいきますから」と、またもや、救助隊本来の姿にもどった。わには、組木でくふうしたものを、何人かで、せつせとつくり始めた。プールのかこいが切れると、「工事の人をよんできましょう」ということで、また、他の幼児に役割を持たせ、くふうしてもらおう。また、救助隊の腕章を紙でつくって「字をかいてちょうだい」といってくる。素材をくふうして、実際つかえる遊具にしようとする気持ち、これが培われてくれれば、本当に嬉しい。教師は、常に共にグループの一員として、あそんでいることはできない。幼児だけの結びつきをそつとまわりから見守っていた方がよいこともある。一員として夢中になってあそぶことが必要なこともある。二本指の敬礼を教えてもらった一日は、温厚な上官のようなすの幼児が見守ってくれた。このように、かいてくると、教師の存在が、無に近いようだが、この中に、いけないこと、危険なこと、人に迷惑をかけることなどは、はっきり教えて、考えられるような幼児にしなくてはいけない。結局、精神的な交流、気持ちのつながりが、幼児との間に持てるようになることが大切だと思ふのである。

○おかし入れつくり

一年間を通して、毎月のお誕生会に、おかしをいただくいれものをつくった。はじめての時は、年長組からのプレゼント、これ

音楽リズムことりになって



で、恐らく、生まれてはじめての手づくりの味を知ったと思う。もちろん、三歳児のことであるから、これはよくかけず、缺も、まだ使えない幼児が、たくさんいる。そこで、はじめは、紙を丸めて形づくる経験からはいつてみた。

た。セロテープも扱えない幼児には、幼児におさえさせて、テープをはってあげたり、個人差に応じてやっていった。おかしがおちると困るわねということで、円錐を知り、円筒なら、何とか底をくふうしなくてはならないことを知る。底は折りまげて簡単にはりつけてしまったり、しぼって、まとめたり、必要から、いろいろくふうする。底だけ別の紙をつける方がよいと気づくが、伴わない技術

は、手助けする。左右均等になど切れなくとも、こうして、自分でつくり上げた自信と満足感で、次の時には、だんだんに、気持ちの抵抗がなく、とりかかるといっていい。

大きく二つ折りのバッグ型をやってみた幼児には、みんなに見せて、円錐や円筒だけでないことも知らせる。まちをつけることなどは、たくさんはいるようにしましょうということ、ヒントを与えてあげる。

また、ある月には、箱型、ある時は、周囲に缺でぎざぎざのきざみを入れて、これがかざりになるように、時には、のりを使ってつける、というように、教師としては、幼児から出てきたものをほめたり認めたり、教師は、助言、刺激を与えて、幼児からの自発的な活動を促して、一年間に、みんなが、楽しみながらつくる姿をみるようになった。

四歳、五歳の組では、怪物になっていたり、家になっていたり、大人ができないような、幼児から考え出したと思うおもしろいものができている。

三歳児も、三月ともなると、きれいな模様で、うめたり、周囲をこまかくきざみを入れたり、持つ柄を、三角にぎざぎざに切つてきたり、二重に折つた柄、二本にわたした柄など、こんなところにも、くふうして一生懸命つくり上げていた。はじめには、細くて短かすぎて切れてしまつて、次には、頑丈なのをつくつてくる、試行錯誤も、貴重な経験であつた。

○音楽リズム

三歳児の自由表現は、先入感のない尊いのがみられる。金魚になった幼児は、自分自身、全身で金魚になったので、床の上に腹這いになって口をばくばくして、もがくように動こうとしている。小鳥になると、何とか、小さい身体になろうとして、身体をちぢめる。前にもかいたが、兎になると、ちよつとも人間の姿になってはいけないように、はねることばかり、こうして、特に三歳児の場合、そのものと自分を同一視して、すつかり、同化してしまうようなので、音楽リズムの面でも、雰囲気からはいっていけば、そのものになりきつて、楽しく十分にあそべると感じる。例えば、王子さまとお姫さまになる場合、きれいな長いスカートをあげましょうといわれただけで、ちよつとすまして、ちよつと恥ずかしそうにお姫さまになってしまう。王子さまは馬にのつて、短い刀をもって……などと話すと、ちよつと貴公子のつもりになって、親切に、お姫さまとダンスもできる。教師は、雰囲気づくりと、教材を、よく幼児の生活をみて、とり入れていかななくてはならない。

こうして、ふり返つてみると、幼児は、何と何と色々な可能性をもっているのだらうと、つくづく思う。それを阻止することなく、いろいろな可能性をひきのばす基を育てていきたい。幼児にとつては、それが、何より楽しい活動の場となるように、とねがついてゐる。